

平成27年1月16日に開催した、 防災にふれあう会inシーズ「防災教室Ⅲ」が、 2015年6月27日の朝日新聞に掲載されました。



今年1月にあった「シーズ」の防災教室には小学生
らも参加した＝阿南市上中町

■助け合える関係へ「教室」

緊急時に助け合える関係を築こうと、徳島県内では障害者施設が年1回、住民とともに避難訓練や炊き出しをする「防災教室」を開いている例がある。

知的障害や自閉症の約50人が暮らしたり通ったりする、阿南市の施設「シーズ」。1月の防災教室には住民や小学生ら約80人も参加し、阪神・淡路大震災の体験談を聞いた後、炊き出しの豚汁やおにぎりで一緒に昼食をとった。

夜間に大地震が起きれば、施設で避難の誘導や救護に対応できるのは夜勤の職員だけ。津波は到達しないとされる内陸だが、道路の寸断などで他の職員が駆けつけられない場合、地域の支援が頼りだ。

一方、介護が必要な高齢者らの受け入れが可能な「福祉避難所」として市と協定を結んでおり、食料や医薬品の備蓄もある。

施設を運営する社会福祉法人の林正敏理事長(65)は「まずは利用者を理解してもらい、地域を守るため、どう協力し合うかを考える第一歩が防災教室です」。毎年、参加する民生委員の岡部義典さん(69)は「困っていれば助けに行きまっせという意識が、住民の間で高くなった」という。

(八角健太)

(朝日新聞 2015年6月27日掲載)